

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 蒼井村正

挿絵 ピエ〜ル☆よしお

第一章	特別風紀委員	006
第二章	淫魔、蠢動	032
第三章	侵攻	060
第四章	フェイラン、捕縛！	080
第五章	フェイラン、淫辱！	105
第六章	拳士、再戦	145
第七章	開門魔宴	182

## 登場人物紹介

Characters



きりどう な お  
**桐堂奈緒**

聖桃学園高等部の一年生。舞闘仙女フェイランに変身する能力を持った少女。スポーツ万能で、行動派タイプの女の子。

みなかみ さ や か  
**皆神紗耶香**

聖桃学園高等部の三年生。学園長の娘にして生徒会長をしている。

たけみや ゆう  
**武宮優**

聖桃学園高等部の三年生。学園に設置されている特別風紀委員会のリーダー。

くろ み こ  
**黒巫女**

漆黒の巫女装束に身を包んだ謎の少女。強大な妖力を持つ。

えん き ぼ う  
**猿鬼坊**

黒巫女の手下。

(炎気が……練れない!)

退魔拳士の顔に焦りの表情が浮かぶ。

スピーカー淫魔が発する発情パルスが子宮を甘く震わせると、せっかく練り上げた炎気が散ってしまうのである。気を練る場所は臍下丹田——女性でいうなら丁度子宮のあるあたりであるため、震動の影響をもろに受けてしまうのだ。

媚震動の効果はそれだけではなかった。

(やだ、開いちゃうっ! アソコが……漏れ……っちゃうっ!)

固く閉ざされていた乙女の入り口が、プルプルと震えながら開花してゆく。

じゅわあっ!

膣内に溜め込まれていた大量の愛液が一気に溢れ出し、股布を熱く濡らした。

「や……あああ……」

顔を朱に染め、恥ずかしげに身震いするフェイランの内腿を、下着の保水力を超えて溢れ出した透明な恥液が伝い落ちてゆく。

汗ばんだ全身から、甘酸っぱい十代の発情臭がふわりと香り立った。

「無様よな!」

それまで少女の痴態を眺めていた黒巫女が、滑るような足さばきで迫ってくる。

「なっ……なめるなああっ!」

炎気の消えた拳で放たれた直突きを最小限の動きでかわし、黒巫女は黒い妖気が絡みついた手のひらでチャイナ拳士の腹に触れた。

「ぐはあっ！」

軽く触れられたただけであつたにもかかわらず、フェイランは身体をくの字に折って膝をついてしまう。とてつもなく重く、冷たく、不快なものを、体内にたつぷりと注ぎ込まれたような感触であつた。手足が重く痺れ、呼吸が思うようにできない。

「まだ……だ！ こんなもの効くものかあ！」

己を叱咤する叫びを上げ、かろうじて立ち上がったフェイランの手足に、スピーカー淫魔の触手が巻きつき、動きを封じてくる。

「くっ！ このおおっ！」

なんとか炎気を練り直そうとする少女拳士の股の狭間に、無数の瘤を密生させた肉縄がズルリと滑り込み、濡れた股布越しに前後して秘裂を擦り責めた。

「ふわあうっ！」

ズルルッ、ジュルルッ！ と長大なストロークで濡れ疼く股間を摩擦され、フェイランは可愛らしくも艶めかしい声を上げてのけぞってしまふ。

濡れた下着の股布がびっちり張りついた乙女のワレメを、ニガウリを数十倍の長さに引き伸ばしたような瘤つき触手が、ズリユッ、ズリユリユリユリユッ！ と前後にス

ライドして刺激してくる。

「くぁ！ あんっ！ んんんんっ！」

催淫音波によつて大幅に感度を増した性器に、許容量を超える快感を送り込まれ、甘い声を上げてしまうフェイラン。布の下ではつくりと割り開かれた柔肉の谷間を、無数の瘤がプルプルと掻き弾きながらストロークし、腰が抜けそうな悦波を発生させた。

(ダメ……ダメえ……このままじゃ……こんな、ザコ淫魔に……ッ！)

確実に押し寄せてくる絶頂の予感が、フェイランの顔を屈辱と羞恥に歪ませる。

強烈な刺激に耐えるのに精一杯で、炎気を練るところではなかった。

「そのぐらいでよからう。果てさせてしまうにはまだまだ早いわい」

大型淫魔の上から身軽に降り立った猿鬼坊が命じる。

数回のストロークでチャイナ少女の身体を痙攣させ、絶頂寸前まで追いつめていた瘤触手は、名残惜しげに離れていった。フルフルと震える白くなめらかな内腿を、新たな愛液の流れが甘酸っぱい芳香を漂わせて伝い落ちてゆく。

手足を縛める肉縄がギリギリと締め上げられ、フェイランの身体をX字型に拘束した。

(罅られる！ 犯されちゃう……)

これまで無敵を誇っていた退魔拳士の胸の内に、初めて恐怖の感情が湧き起こった。身も心も蹂躪し、女悦のマグマで融かし尽くすような、容赦のない快楽責め——それが淫魔

の手に落ちた者の運命であることを、彼女はいやというほど知っている。

「ずいぶん発情しておるな。女であること……それがおぬしの敗因じゃ。いかに超絶の力を持つていようと、欲情した身体ではそれを自在に振るうことはできぬ……」

深紅の唇から言葉を紡ぎ出しながら、黒巫女は深紅のチャイナコスチュームにくつきりと浮かび上がったフェイランのボディラインを指先でなぞる。

「さっ！ 触る……なあ！」

拘束されたスレンダーな肢体をよじって叫び悶える少女の抵抗など完全無視で、極上のプロポーションを指が這い回る。

白くたおやかな女淫魔の指は、まろやかに張り出した腰のラインから、細くくびれたウエスト周りをたどり、布越しにも鍛え抜かれた腹筋の弾力が感じられる腹部をさわさわと撫で回す。途中でへその窪みを探り当てると、その周囲をくるくるとなぞるようにくすぐり回してきた。

「うっ！ く……ん……や、やめ……んんんっ！」

ただ撫でられているだけなのにもかかわらず、ゾクゾクと総毛立つような悦波が肉体の奥深くにまで浸透してくる。高等淫魔の愛撫がもたらす人外の快感が、しなやかに鍛え上げられた退魔拳士の肢体を襲っているのだ。

すでにぐし濡れになった秘裂の奥から、失禁を思わせる大量の淫蜜が溢れ出し、ぬめ

った流れとなつて、震えわななく内腿を伝い流れてゆく。

「よい身体じゃ。美しく、そして強靱に鍛え抜かれておるわ……」

賞賛の響き混じりの甘い声で少女の鼓膜さえも犯しながら、両脇腹を黒巫女の指が這い上つてくる。拒否の言葉もろくに出せぬほどの快感に襲われ、シャープに引き締まった肢体を震わせる退魔拳士のバストに、女淫魔の両手があてがわれた。

「くう……うっ、ううううう〜！」

上半身でもっとも敏感な部分に触れてくる指の感触に、深紅のチャイナ少女の身体が弓なりにのけぞり、硬直する。豊かな膨らみを介して送り込まれる魔性の快感で、心臓が止まってしまうのではないかという不安すら湧き起こってくる。

「今のおぬしならわかるであろう。我らの与える快樂には何者も抗えぬ」

やわやわと指を蠢かせてコスチューム越しに乳房を刺激しながら、黒巫女は告げる。

じんわりと指をめり込ませ、小癩なまでに押し返してくる乳肉の弾力を確認し、下から大きくすくい上げてこね回しては、たわわな肉果の量感を楽しむ。

痛いほどに尖り勃つて、コスチュームに可愛いポッチを浮かび上がらせている乳首にはあえて触れず、女淫魔は退魔拳士の乳房をいたぶり抜いた。

「炎の拳士よ、声も出せぬほどに感じておるのじゃな。そなたの女悦が指を通して、わらの身体に流れ込んでくるわ」



むにゅっ、むにゅっ、という揉み音が聞こえてきそうな執拗にして深い指使いで、赤いチャイナ服越しにバストが揉みしごかれる。固く目を閉じ、バストを女淫魔の指に委ねる形で弓なりにのけぞった退魔拳士は、必死に歯を食いしばって嬌声を耐えている。

（今、声を出したら……もう歯止めが利かなくなっちゃう。耐えるんだ！ こんな責めで負けたりはしないっ！）

心では抵抗を誓うフェイランであつたが、その肉体は、高等淫魔のテクニクが発生させる容赦のない快感に対し、正直きわまりない反応を示してしまつていた。

これ以上勃起しないと思つていた乳首がさらに硬さと感度を増し、コスチュームを突き上げてヒクヒクとしやくり上げる。

乳房の根本を、ぎゅううっ、とやや強めに圧迫されると、限界を超えて突出させられた乳首のひくつきは、布越しにはつきりと確認できるほどに激しくなつた。

深紅のコスチュームをツンと盛り上げ、ヒクッ、ヒクッ、と震えている乳先の様子は、まるで小さなペニスが射精寸前の脈動を起こしているかのようである。

（そっ、そんなに揉まれたら……おっぱいだけで……ダメ！ ダメえええ……）

心の中で叫ぶフェイランの美乳を、黒巫女の白い指がなおも、むにゅっ、むにゅっ、と深く緩やかな指使いで揉み廻る。

コスチュームの裏地に激しく擦りつけられた乳先はジンジンと甘美な熱を帯び、少女を

望まぬ頂上へと引きずり上げてゆく。

「くふうっ……んっ、ううううううっ！」

固く唇を噛んで声をこらえながら、退魔少女は信じられないほど甘美な乳揉み責めに翻弄されていた。乳房へのソフトタッチの愛撫だけでフェイランを絶頂寸前まで追い込み、黒巫女は唐突に指を離す。

「はう！ あ……はあ、はあ、はあ……」

果てさせられずにすんだという安堵と、わずかな物足りなさを心の奥底で感じながら、囚われの退魔拳士は赤く上気した顔で喘いでいる。

「わらわの手でおぬしを墮とすのは造作もないことじゃが、猿鬼坊がそなたにご執心でう。廻りはこやつに任せることにしよう」

悔しげに睨みつける退魔拳士の視線を涼しげに受け流し、女淫魔は背後で見物していた妖怪僧に責め手を譲った。

「ふほほっ、感謝いたしますぞ、黒巫女殿。さあて、最強の退魔拳士の身体、存分に味わってみようかの。おっと、その前にわしの作品を紹介させていたどころ」

そう言った猿鬼坊は、奇怪な催淫パルスを放った巨大淫魔を振り仰ぐ。それは、今までフェイランが見たことのない異様な姿をしていた。身体のうちここに、機械の部品を思わせるものが融合しているのである。

円錐形の身体の表面は、何百本もの電子ケーブルに覆われており、身体の所々から、明らかにスピーカーだとわかるパーツがいくつも突き出していた。

「こやつはわしの最高傑作！ 電子機器と淫魔の完全な融合体じゃ！ 触手の先端には高性能カメラ、電波や有線通信の妨害能力や、ネットワークへの侵入機能も備えておる。ハイテク電子戦用淫魔じゃよ！ どうだ、凄かろう？」

「なんて悪趣味な……」

切れ長の目に怒りの炎を宿して言い、囚われの退魔拳士は猿鬼坊を睨みつける。

「ぐふふつ、おぬしも薄々察しておるじゃろうが、おまえらの仲間である小娘が犯される様子を中継したのもこやつよ。いいアングルから撮影できておったじゃろう？」

「……許さない……おまえたちは絶対に……絶対にゆるさないぞっ!!」

拘束された身体を怒りに震わせ、まさに火の出るような表情と口調で叫ぶフェイラン。

「誰も許して欲しいなどとは思っておらぬわい。憎み、怒り、恥じらい、拒みながらも快楽に狂うてゆく娘の姿をわしは見たいのじゃよ！ さて、始めるとするかろう」

好色そのものの笑みを浮かべ、猿鬼坊は囚われの退魔拳士を淫獄に落とすべくにじり寄ってきた。

第五章 フェイラン、淫辱！

「まずは下ごしらえじゃな、おい、おまえ、ちいっと可愛がってやれ。ただし、秘所と尻に触れることは許さぬぞ。そうじゃの、あの小生意気に突き出した乳でもたつぷりと揉みまくってやるがよかろう」

猿鬼坊はしわがれた声を上げて、傍らに立っていた人型淫魔に命じる。

「はっ！ 喜んでっ！」

命を受けた下級淫魔は、にやり、と好色そうな笑みを浮かべ、拘束されたフェイランにゆっくりと歩み寄ってきた。

「くう……」

低く呻き、追いつめられた獣のような目で睨みつける退魔拳士であったが、淫魔は凶太いのか、それとも単に鈍いだけなのか、特に目立った反応は見せなかった。

浅黒い肌をした人型淫魔は、ガッチリとした筋肉質の体型で、体毛らしきものが一本もなく、脂ぎった光沢を放つ肌をしている。

無個性ではあるものの、端正と言っても差し支えない整った顔立ちなのだが、性欲の解消をすることしか考えていないようないやらしい光をたたえた目と、全身から立ちのぼ

る濃厚な淫気が嫌悪感を催させた。

全裸の股間からは、子供の腕ほどのサイズの牡器官が、下腹を打たんばかりに勃起して、ピクッ、ピクンッ、としゃくり上げている。亀頭の先端は、脂ぎった先走りの粘液でぬめった光沢を放っている。

(嫌だ……あんなのに……炎気さえ練ればこんなザコなんか！)

これから自分の身に降りかかってくるであろう快楽の責めを想像し、どす黒い絶望と恐怖を覚えながらも、フェイランはまだ炎気を練る努力を続けていた。

催淫音波の照射はまだ続いており、性器周辺と左右の乳首にはむず痒い震動が渦巻いている。そのせいで、炎気も小さな火種以上には育てられないのだ。

それでも、炎龍拳の少女は、いつ訪れるかわからぬ逆襲のチャンスに賭けて、身体の奥底で小さな炎の種を守り続けている。

「ゲへへへ、でっかいおっぱいだなあ」

下卑た声を上げた下級淫魔は、無造作に手を伸ばし、深紅のチャイナ風コスチュームを大胆に突き上げた乳房を握り締めてくる。

「このおっ！ さっ、触るなザコ野郎っ！ 胸からでも炎気は出せるんだぞっ!!」

今にも嘔みつかんばかりの剣幕で叫ぶフェイランの声に、人型淫魔は一瞬、ためらうそぶりを見せた。

「恐れることはない。炎が出せるようなら、とっくにその縛めを焼き切っておるわ」

猿鬼坊が横から余計なことを告げる。

妖怪僧の言葉に頷き、薄ら笑いを浮かべた下級淫魔は、極上の張りを感じさせる乳房を弄り始めた。コスチュームの胸元に開いた逆ハート型の切り抜きから、白い果肉を覗かせている美乳が、ぎゅっ、ぐにゅっ、ぎゅむうっ！ と荒々しい指使いで揉み歪まされる。まるでたっぷりと蜜を詰め込んだゴム鞠のような弾力を持ったたわわな肉球は、ごつい指の圧迫のままに歪み、たわまされたかと思うと、プルン！ と音がしそうな勢いで元の形に復元する。その様は、いかなる辱めにも屈しないと誓う、退魔少女の意志を具現化したもののようにも見えた。

「くう！ つ、つぁ！ こんなこととしても……わたしは……屈しないぞっ！」

柔肉に食い込んでくる指がもたらす痛みと同時に襲ってくる、まぎれもない快感に眉根を寄せながらも、少女拳士は気丈な声を上げる。

「げへへっ、そんなこと言いながらも、声が震えてるぜ」

「怒りで震えてるんだっ！ 貴様らみんな……焼き尽くしてやるっ！ くっ！ んっ！」  
拘束された身体を揺すり立てて叫び身悶えする少女拳士の乳房を、ごつい指が遠慮なしにこね回す。柔肉の房を、深くハードに揉み込まれるたびに、胸の奥に溜まったドロドロした淫欲のマグマまでもが一緒に掻き混ぜられ、さらに熱を帯びてゆくのが感じられる。

(こんな……こんなザコ淫魔に……っ！)

炎気をまとわせたデコピン一発で消し飛んでしまうようなザコに好き放題にされる屈辱と羞恥で身体が震え、悔し涙がこぼれそうになるのを、フェイランはぐっ、と耐える。

怒りと屈辱の感情が、押し寄せる快感の波に対する堤防の役目を果たしていることに気づいた少女は、叫び、罵ることで自我を保とうとしていた。

「これがフェイランのおっぱいか、弾力たっぷりいい揉み心地じゃねえか。どれ、お味の方も試させてもらうぜ」

恐怖の存在であった炎の拳士を黜れることに興奮した人型淫魔は、浅黒い顔に邪淫そのものの笑みを浮かべて顔を寄せてきた。

「このお！ いい加減に……あうっ！」

チャイナコスチュームの胸元に開いた逆ハート型の切り抜き部分に、下級淫魔の舌がヌルリ、と這い込み、乳房の谷間をねっとり舐めなぞる。

まるで巨大な軟体動物をバスタの谷間に挿入されたかのようなおぞましい感触に、深紅のチャイナ少女の身体が、ブルッ！ と大きく震えた。

「こっ、この気色悪くて臭い舌を今すぐに抜けっ！ やっ、抜けったらあ!!」

「美味い……こんなに柔らかくて美味いおっぱいは初めてだあ……」

下級淫魔は、フェイランの罵倒も聞こえぬ様子で、少女の乳肌の味と感触に酔いしれて

いる。

人間とは比べものにならぬほど長い舌は、ぴっちりとはわさわさわ肉球の狭間を割り開き、ぬちゃっ、ぬちゃっ、と粘ついた唾液音を立てて抽送された。

白くなめらかな肉果の谷間は、たちまちのうちに生臭い唾液に濡れまみれてゆく。乳房の丸みにぴっちりとは密着したコスチューム越しに、乳房の表面をヌルヌルと舐め回している太い舌の輪郭がくつきりと浮かび上がっている。

鍛え抜かれた胸筋を土台にして、見事に突出したお椀型の乳房に巻きつくようにして張りついた淫魔の味覚器官は、ぬるっ、ぬるっ、と蠢いて、少女の肌に浮いた汗を舐め取り、ミルクのような芳香と甘味を持った極上の肌の味を堪能する。

「やめろっ！ 気持ち悪いっ！ このお！ ふあ……ああ！」

心臓を直接舐め回されているような異様な快感に胸を貫かれ、フェイランはガクガクと身震いしながらも抵抗を続けていた。

下級とはいえ、淫魔の愛撫は人のそれとは比べものにならぬ快感を湧き起こらせ、その唾液は女を狂わせる媚毒の成分を含んでいる。舐められた部分が熱を持ってジンジンと疼き、柔肉の内側にまで妖しく甘美なものを染み込ませてくるのだ。

「あー、うまいぜ。しっとり甘い肌を舌に吸いついてきやがる……」  
ぺちゃっ、ぺちゃっ、と舌なめずりの音を立て、乳球の狭間を唾液でドロドロに濡れ汚

しながら、淫魔男は恍惚の声を上げる。高い霊力を持った者の肉体や、その者が発生させる快楽の波動は、淫魔にとってこの上ない美味なのだ。

一方、颯られる側のフェイランは、想像以上におぞましく、そして甘美な淫魔の愛撫がもたらす快感を必死に耐えていた。先ほど黒巫女によって揉み立てられ、淫気を染み込まされて感度を増している乳肌は、恥ずかしいほどに感度を増してしまっている。

肌をヌルヌルと這い回る生温かい舌の感触は、たちまちのうちに妖しい快感に変換され、少女に淫らな反応を強いてくるのだ。

心臓の鼓動が速まり、全身が火照り疼いてほんのりと紅潮した。

グググフと鼻を鳴らしつつ、人型淫魔は両手にあまるサイズの乳房をむにゅむにゅとこね回し、柔肉の谷間で舌をくねらせて美肉の丸みを犯し抜く。

大量に分泌される唾液は乳房の間をトロトロと流れ落ち、腹直筋のシルエツトが浮かんだ腹部を伝ってへその窪みへと溜まり、そこから溢れ出して股間へと下ってゆく。

「う……あう……」

下着にじんわりと染み通ってくる生温かい唾液の感触に、フェイランは不快げに眉をひそめ、腰をもじつかせる。たとえ少量であっても、淫魔の唾液は媚薬成分を含んでいる。すでに濡れ開いてしまっている敏感な粘膜組織から浸透させられたら、今以上の発情反応に襲われてしまうことは明らかであった。

（これ以上乱れちゃダメだっ！ ……何か別のことを考えるんだ！ ……学園は……みんなはどうなったんだろう……紗耶香様は？）

菌を食いしぼり、熱い波のように押し寄せてくる悦感に抗いながら、少女拳士は仲間たちを案じることで闘志を維持しようと試みる。

状況は絶望的であった。戦闘指揮官でもあり、優秀な退魔剣士である武宮優と、最強の守護者であるフェイランを失った今、聖桃学園には淫魔の侵攻を阻める戦力はもう残されていない。一気に攻め込まれたら、陥落は必至、学園の生徒たちが恥辱の責めにさらされることは確実である。

（わたしのせいだ！ わたしが先走ったから……わたしが負けちゃったから！）

固く閉じた目尻に痛恨の涙を浮かべるフェイランをあざ笑うかのように、バストの丸肉が揉みこねられ、乳房の谷間を舌がぬちゅぬちゅと抽送する。唾液まみれのざらついた味覚器官に擦りまくられた乳肌は、赤みと熱を増してむっちりと張りつめ、強靱な布地でできたチャイナコスチュームをはち切れさせんばかりである。

深紅のコスチュームを盛り上げたバストの頂点には、布地を突き破りそうなほどに勃起した乳首のシルエットがくつきりと浮かび上がり、少女の喘ぎに合わせてビクッ、ビクッ、と断続的にしゃくり上げていた。

「ずいぶん感じてやがるな。乳首もピンピンじゃねえか」

下級淫魔の指が、尖った乳先を、ピンッ！ と強く弾いた。

「ふわうっ!!」

乳首から発した喜悅の波紋が乳房全体を震わせ、深紅の退魔拳士は甘い声を上げて、ビクンッ！ と大きくのけぞってしまふ。

「ひやははっ！ こいつはおもしれえ！」

調子に乗った下級淫魔は、左右の乳首を交互に弾き、退魔拳士に高い声を上げさせる。たわわな乳肉が、乳首弾きの衝撃でプリンのように震えた。

「たまんねえ！ じかにしゃぶらせてもらうぜ！」

興奮した淫魔はさらに大胆な行動を仕掛けてくる。左肩にある留め具が外され、チャイナ服の胸元が大きく掻き開かれた。

揉み込みによっていつも以上に張りを増していたバストが、コスチュームの締めつけから解放され、プルルンッ！ と大きく揺れ弾みながらまろび出る。

白くきめ細かな肌に包まれたたわわな肉果は、鍛え抜かれた胸筋に支えられて、重力に抗うかのように突出している。淡いピンク色をしたほどよいサイズの乳輪の中央では、小指の先ほどに尖り勃った、プリン型の乳首がピンと天を仰いで震えていた。

水蜜桃を思わせる乳房の神々しいばかりの美しさに、見物していた淫魔の間からざわめきが上がる。

「こいつは極上だぜ！ いただきだあ！」

興奮の極みに達した男は、目の前で揺れる極上の乳肉に、飢えた犬のようにむしゃぶりついた。柔らかな乳肉を前歯が甘噛みし、巨大な舌が乳房の付け根から先端までを、ペロオオッ！ と一気に舐め上げる。プルンッ！ と大きく揺れ跳ねた乳首の先から、塗り込まれた唾液が糸を引いて飛んだ。

「きゃふうっ！」

白い乳球にナメクジの這い跡のような唾液がこびりつき、舐め弾かれた乳首からピリピリと痺れるような悦波が湧き起こる。

「そうじゃ。そうやって絶え間なく快感を送り込んでおけば炎気は練れぬ。もつともつと舐めてやれ！ 揉んでしゃぶって、乳だけで狂わせてやるのじゃ！」

猿鬼坊に命じられた淫魔の舌は、左右の乳首を交互に舐め弾き、ちゅぱちゅぱと音を立てて吸い上げて、少女に悶えを強要する。浅黒くごつい指は乳房の根本を容赦なく揉みしだき、汗と唾液にぬめる柔肉を好き放題に責めさいなむ。

「んっ！ んんっ……くうんんんっ！」

拘束された肢体をのけぞらせ、必死に声をこらえるフェイランの耳に、周囲で見物していた淫魔どもが騒ぎ立てる声がかすかに聞こえてくる。

(こんなに……こんなに凄いなんで……ッ!!)



想像を絶する快感の嵐に翻弄されながら、退魔拳士は淫魔の愛撫を甘く見ていたことを痛感していた。

話には聞かされていたが、他人とのセックスの経験もなく、快感慣れしていない彼女は、淫魔の与える魔性の快感というものがいまいち実感できていなかったのである。

戦闘においても、炎龍拳の圧倒的なパワーで敵を瞬時に葬り去ってしまったため、触手に捕らえられて身体をまさぐられた経験もない。

そんな無垢の身体に執拗な乳責めを施されているのである。淫気によって発情し、感度を増している乳房に、さらに大量の媚薬唾液を塗り込められ、下級とはいえ淫魔の技巧で快感を送り込まれているのだ。

二つの乳房の中は、まるで快感の溶鉱炉のごとき状態になっていた。根本から先端に向かってグリグリと深い指使いで揉み上げられ、乳首の先端に熱くドロドロした疼きを収束させられた状態で乳先を舐めしゃぶられ、甘噛みされる。

乳首から立て続けに爆発的な快感の波が湧き起こり、深紅のチャイナ少女の身体をのけぞらせた。

触れられてもいない秘裂から熱い潤みが漏れ出し、濃密な愛液の匂いが香り立つ。

(ダメ……炎気が……炎気の花種まで吹き飛んじゃう……負けるな！ こんなことで負けるな！ フェイランッ!!)



フエイランの股間からミミズ触手を離し、失神したままの優のもとに歩み寄った猿鬼坊は、喜々とした表情を浮かべて少女剣士のスレンダーボディをまさぐり始めた。

「う……あ……あああ……」

ヌルヌルと這い回るミミズ触手に秘裂を探られ、亀頭状の先端から伸びた舌尖に尻孔を舐めほじられて、優は艶めかしい喘ぎを漏らして身をよじる。

「ぐふふっ、この娘の身体はちいっと色気が足りぬなあ。飾りを施してやろう」  
猿鬼坊の左腕から伸びた触手には、少女剣士の木刀が握られていた。

もどかしげにくねる股間の狭間に木刀の柄があてがわれ、膣口をこね回し始める。

たちまちのうちに溢れ出した淫蜜が、黒光りする木刀に攪拌されてクチュクチュと恥ずかしい粘音を立てた。

「くううっ！ 武宮先輩まで……」

菌ぎしりするフエイランに、黒巫女の冷たい視線が向けられる。

「観念せい。そなたらには、この世のものではない愉悅の数々を与えてやろう。仲間が罵られる様をここで見ておるがよい」

黒巫女は妖艶な笑みを浮かべて宣言しつつ、髪束触手を巧みに使って、紗耶香の着衣を脱がせにかかった。

「く……やめろっ！ 紗耶香様を……辱めるなっ！」

目の前で憧れの先輩が引き剥かれてゆく姿を見せつけられ、フェイランは怒りの叫びを上げて身悶える。激しく怒ることで再び炎気をまとえないかというかすかな望みもあったが、まるで悪夢の中にいるかのように、身体に力が入らない。

「辱めてなどおらぬ。この娘の真の姿をおぬしにも見せてやろうと思うてのう」  
妖しい笑みを浮かべて黒巫女が告げた。

その言葉を聞いた生徒会長の身体が、ビクンッ！ と激しく反応する。

「真の姿だと!? なっ、何をバカなことをっ！」

恐怖にも似た予感を覚えつつ叫ぶフェイラン。

淫気の影響による肉体の疼きと、それがもたらす後遺症について説明してくれたときの、愁いに満ちた紗耶香の表情を思い出す。

剣の巫女として、フェイランをも上回る数の淫魔たちを葬り去ってきた紗耶香である。その身に浴びた淫気の量も半端なものではないはずであった。

「すぐに見せてやろうほかに、少し黙っておれ。そなたの叫び声は耳障りじゃ」

「く！ うっ！」

しゅるるっ、と喉に巻きついてきた黒髪に締め上げられ、炎龍拳の少女は声を封じられてしまう。

「!!……お願いっ！ それは……それだけは……ああああんっ!!」

表情を引きつらせて声を上げた紗耶香であったが、黒巫女は髪の毛触手を使い、シャツのボタンを外し、スカートのサイドジッパーを降ろして剥ぎ取ってしまう。

たちまちのうちに、学園のカリスマは上半身は前ボタンを全てはだけられた制服のシャツ、下半身はショーツとハイソックスのみというフェティッシュなスタイルにされた。

無念そうに顔を伏せて震える少女の身体は、ふくよかなようではないながらも、ウエストは細くくびれ、腹部にはほどよく鍛えられた腹直筋のラインが浮かび上がっている。

むっちりとした量感豊かなヒップのラインは、健康的に張りつめた太腿へとまろやかなカーブを描いて続いていた。その性格、物腰に加えて、肉体もまた、優しさと母性を感じさせる先輩少女の半裸身である。

「よい身体じゃ……剣の巫女に変身できるときに鬨ってやりたかったのう」

紗耶香の身体を後ろから抱きかかえる形で立った黒巫女は、見事なプロポーションを持った生徒会長の肢体を白い指で愛撫し始めた。

「おっ、およしなさい……こんな……ッ!!」

白い清楚なブラに包まれた、たわわなバストの重みを量るかのようには右手ですくい上げ、緩やかな指使いで揉みこねられると、紗耶香は唇を噛んで声を耐える。

熟しかけの白桃のように、ほのかに赤みを増したFカップオーバーの肉果の丸みを、女淫魔の純白の指が、ふにゅ、ふにゅつ、と柔らかく揉み歪ませ、押し寄せる魔性の快感に

のけぞり喘ぐ細い喉元を、女淫魔の深紅の唇がそつと吸いついばむ。

なめらかな腹部を撫で下ろした左手の指は、びっちり閉じられた腿の狭間で小さく上下して、ショーツの薄布越しに秘裂をなぞり探っていた。

「くふ……んっ……あ……あんっ！」

後ろからじんわりと豊乳を揉まれ、純白のコットン地越しに股間のスリットを優しくまさぐられた生徒会長は、鼻にかかった声を漏らして身を震わせる。白くなめらかな肌がパアッ！ と紅潮し、イチゴミルク色に染まる。

恥ずかしい声が出てしまうのを必死に耐えようとはしていたが、股間のデルタ地帯に滑り込んだ女淫魔の指がかすかに蠢くたびに、紗耶香の身体は電気ショックを与えられたように、ぴくっ、ぴくんっ！ と派手に反応し、喉奥からすすり泣くような呻きを漏らしてしまう。

彼女の身体に加えられているのは、上級淫魔の超絶愛撫である。変身能力を失った少女にとつては、許容量をはるかに超える快感の洗礼であった。

「そういえば、この娘、おぬしが猿鬼坊に嬲られて果てる様を見せつけられて、激しく欲情しておったな」

紗耶香のうなじに唇を触れさせたまま、フェイランに視線を向けて黒巫女が告げる。

「嘘ですっ！ よ……欲情など……していませんっ！」

頬を染めて呼吸を荒げながらも、あわてて否定の声を上げる生徒会長。

（そ、そんな……わたしが……奈緒の姿でスライムザーメンお漏らししちゃうところを見て……紗耶香様が……嘘……そんなの嘘だあ!!）

信じられぬ、という表情を浮かべ、胸の内で叫ぶ炎龍拳士。

「隠さずともよい。フェイランが嬲られる様を視界に送り込まれ、秘所をしとどに濡らしてしまっておったではないか……今も下着に湿りが残っておるわ」

赤い唇に妖艶な笑みを浮かべ、ショーツの股間をそつと撫で上げる黒巫女。

「……」

悔しげな表情を浮かべた紗耶香は、無言のまま目を閉じ、顔を背ける。

その態度が、黒巫女の指摘が真実であることを示していた。

目尻に浮かんでいた涙が、きらめく流れとなって頬を伝ってゆく。

「我らの身体より発する魔性の気に肉体を侵されるがゆえに、退魔士の現役期間は短い。

その身を蝕まれ、淫情に心までも支配される前に、後進の者に道を譲って隠居するのがならわらしいのう……」

下着姿になった紗耶香の身体をなおも撫で回しながら、黒巫女は言う。

たわわな胸を守っていたブラのカップがずり下げられ、白い双乳がプルンと震えながらまろび出た。見事なお椀型をしたバストの頂点では、淡い桜色の乳首が、周囲をふっくら

と縁取る乳輪ともども、ツンと上を向いて自己主張している。思わず顔を埋めて頬ずりしたくなるような、豊かで魅力的な乳房であった。

「たとえばこの胸乳……見事に育っておるわなあ」

股間を觸っていた左手の指が、つ、つ、つ、つ、と腹を滑り上がり、乳肉の曲面を撫でる。淫蜜にぬめ光る指先が、若々しい張りを持った乳房の丸みを撫で上げ、小指の先ほどに尖り勃った薄桃色の乳首をきゅっ、と摘む。

「あううっ！ お願ひ……後生だから……これ以上はっ！ ひあうッ！」

指に絡んだ濃厚な愛液のぬめりを利用して左乳首をヌルヌルと揉み觸られ、右乳房を鷺掴みにされてきつくこね回されて、紗耶香はピンク色に染まった半裸身をくねらせて甘い声を上げてしまう。

見せつけられているフェイランの乳首までもがムズムズと疼いてしまうような、いやらしく巧みな指使いであった。

「……退魔士の中には、身を蝕まれてもなお戦い続けようとする者もおる。剣の巫女……この娘もその一人じゃ」

乳責めの指の動きが強まった。硬く尖った乳首が捻りを加えて揉みながら引つ張られ、乳房がいびつに歪むほどにこね回される。許容量を超える快感を送り込まれた紗耶香は狂ったように髪を振り乱して身悶えた。

上級淫魔の超絶技巧を駆使して、一時も休むことなく揉み廻られる右乳房の先端では、乳首の根本を柔らかく縁取った乳輪がふつくらと丸く盛り上がり、その中心では小指の先ほどに勃起した乳先が今にも弾けてしまいそうにひくついている。

ハードな引つ張り責めを受けた左乳首などは、今にもねじちぎられてしまいそうだ。

「この娘の身体は淫毒に侵し尽くされておる。劍の巫女として戦い、我が同胞を数多く手にかけてのであるうな。……そして、過剰な淫気をその身に溜め込んだ者は……こうなるのじゃー！」

ひととき強い口調で告げた黒巫女が右乳房に食い込ませた指の力を強め、根本から先端に向けて一気にしごき上げた。同時に、左乳首が、ぎちいいっ！ と力任せに摘まれる。

「ひッ!! きゅふうううーんッ！」

きゅうっ！ と身をこわばらせた紗耶香が引きつるような声を上げた次の瞬間、プシッ！ プシュッ！ プシユルッ！ とピンクの乳先が純白の液体を迸らせた。

二メートル近い距離を飛んだ白い飛沫が、フェイランの身体にも降りかかる。

ふわりと甘く、どこか懐かしい匂いが炎龍拳士の鼻孔に流れ込んできた。

「これ……は……まさか!?’

母性溢れる紗耶香が、豊かなバストの先から乳汁を迸らせてしまったことに、フェイランは不思議と納得できてしまう気持ちと、この光景は、黒巫女が見せている淫らな幻術な

のではないかという疑念を半々に感じている。

桐堂奈緒という一人の少女にとつて、皆神紗耶香という存在は、なかば神格化された憧れの対象であつた。その紗耶香が、搾乳されて母乳を噴き出し、あからさまな喜びの表情を浮かべてよがり悶えているのだ。

「我らと戦うというのはこういうことじゃ。たとえ戦いに勝利しようとも、淫気は確実におぬしらの身体を侵し、このように淫らに作り変えてゆく。……淫気を存分に吸つた退魔士は天敵であると同時に、最高の獲物でもあるのじゃ」

のけぞり悶える紗耶香の豊乳を、ふにゅつ、むにゅつ、と緩やかにしごき上げて搾乳を続けながら、黒巫女は告げる。

「そつ、そんなに……胸、しないでくださいませ……ミルク搾られると、あふ……んんつ！ 変になつてしまいますつ！ はうんんんーつ！」

「淫らになるのじゃろう？ 遠慮はいらぬ、もつともつと悶え狂うがよい！」

切なげに眉を寄せ、身をよじらせて乳搾りの快感に悶える生徒会長の乳房を、女淫魔の指がやんわりと握り締めてくる。柔肉の果実に白魚のような指が深々とめり込み、内圧を高められた乳房の先端が、白い滴を滴らせながら、ピン！ と尖り勃つ。

「もつ、もう、搾らないで……くださいませ。やあぁ……恥ずかしい……あううつ！」  
じわじわと圧力をかけられているため、乳汁は一気に迸ることができないでいる。乳首

と乳輪にプツプツと滲み出してきた母乳は、白い水玉状に盛り上がり、やがて表面張力の限界を超えて乳房の丸みを伝い流れてゆく。

「あああああんっ！ そんなにされると、乳首ッ！ 乳首が……おっぱいが痺れて……もう、もうダメ！ ダメですうううっ！」

乳首の芯を母乳が少しづつ通過してゆく感触が、たまらぬ快感を生み出すらしく、紗耶香は普段の落ち着き払った物腰をかなぐり捨てて泣き悶える。

少女の痙攣に合わせ、黒巫女の指に驚掴みにされた乳房の先から、純白の滴があたりに飛び散った。

「紗耶香……様……」

呆然とした表情でつぶやくフェイランは、憧れの上級生が悶え狂う様から目が離せない。鮮やかなピンク色をした紗耶香の乳先から乳汁がスプラッシュするのに合わせて、深紅のチャイナ服を突き上げたバストの頂点が激しく疼く。下着の奥では、アナルとヴァギナがムズムズと疼き、クリトリスが痛いほどに勃起してゆく。目の前で展開される淫らな光景に、溜め込まれた淫気が呼応して肉体を昂らせているのだ。

切なげな表情を浮かべるフェイランを見つめつつ、黒衣の女淫魔はたわわな果肉に指をめり込ませ、学園のカリスマである聖少女に乳汁の放出と悶えを強要し続けている。搾れば搾るだけ、ぴゅるっ、ぷしっ、ぴゅるるっ！ と勢いよく迸る乳汁は、白い放物線を描

いて飛翔し、フェイランのチャイナコスチュームをじつとりと濡らす。常識では考えられぬ大量分泌であつた。

(あんなに出てる……おっぱいってそんなに出るものなの？ これは、悪夢？)

フェイランの胸に浮かんだ疑問に答えるかのように、黒巫女が口を開く。

「この乳汁は、わらわの送り込んだ気変じたもの。この娘の身体は、過剰な淫気をこのように物質化して排出しようとしておるのじゃ。それゆえに、淫気を込めれば込めるほどに、乳汁の分泌は盛んになり、快感も強くなってゆく……」

かすかにかすれた淫靡な声音で告げた黒巫女は、背後から左右のバストを鷲掴みにすると、柔肉の果実を、ぎゅむうううっ！ と握り潰さんばかりに揉み搾つた。

たわわなバストの芯を、淫気変じた乳汁が熱い奔流となつて駆け抜ける。

「あああああーんっ!! イくっ、イッちやいますうううっ！」

抑えようのない歓喜の声を上げて紗耶香がのけぞり、左右の乳首が、ぶちゅううううっ！ と白いミルクシャワーを噴き上げた。

まるで小型のペニスのようにヒュクヒュクとしゃくり上げる乳首の先端から、断続的に熱い母乳がスプラッシュする。

先ほどまでの射乳とは比べものにならないぬ量の乳汁の雨がフェイランに降り注ぎ、深紅のチャイナコスチュームを白く甘く濡らした。布越しに染み通つてきた母乳の温かさが、こ



れが悪夢ではなく現実であることを退魔拳士に思い知らせる。

紗耶香のよがり泣きをBGMに、乳汁のシャワーは断続的に降り注ぎ、淫気を変じた母乳が、布地を通して退魔拳士の素肌にねっとりまとわりつく。全身から立ちのぼるミルクの甘い匂いが少女の官能をさらに煽った。迸る熱い乳汁の洗礼を受けることを、心地よいとさえ思い始めている退魔拳士であった。

「さて、剣の巫女はこの程度でよかろう。次はそなたの番じゃ」

盛大な射乳絶頂の快感に意識を飛ばされたのか、ぐったりとうなだれた紗耶香から離れ、黒巫女が歩み寄ってきた。

「はっ！ やっ、よるなあ！ 指一本でも触れたら焼き尽くすぞっ！」

手足を緊縛する黒髪触手をギシギシと揺すり立て、嘯みつかんばかりの剣幕で怒鳴り散らすフェイランであったが、女淫魔は妖艶な美貌にあざけるような笑みを浮かべ、白くたおやかな手を伸ばしてくる。紗耶香の乳汁に濡れ、皮膚への密着度をさらに増している深紅のチャイナコスチューム越しに、バストがやんわりと揉まれた。

「ひゃう……ッ!!」

鍛え抜かれた肢体を、ビクンッ！ と跳ねさせ、嬌声を必死に押し殺すフェイラン。

高等淫魔の指は、軽い動きにもかかわらず、想像を絶する快感を少女拳士の身体に送り込んでいた。触れられた場所から悦波が波紋のように広がり、身体中の細胞が歡喜にわな

なく。つ、つ、つ、と乳房の丸みに沿って指を走らされただけで、深紅のチャイナ少女の身体が痙攣する。

「よき反応じゃな。わらわの愛撫、この身体で存分に味わうがよい……」

乳房から脇の下に至るラインを撫で上げ、フェイランの身体をのけぞらせた黒巫女の指は脇腹のラインをゆつくりと下降してゆく。

（クソッ！ こんな……敵に……今……今が反撃のチャンスなのに……ッ！）

ゾクゾクゾクッ！ と全身をわななかせせる快感の洗礼を受けながら、フェイランは必死に炎気を練り上げようとしている。一発でいい、持ちうる限りの炎気を込めた突きを黒巫女の顔面に叩き込めたら……そう思ってはみるものの、マッチの火ほどの炎気も練り上げることができなかつた。

そうこうしているうちにも、女淫魔の指はフェイランのボディラインに沿って下降し続けていく。見事にくびれたウエストを経て、プリッ、と張り出したヒップのラインをなぞり、腰脇に開いたスリットから指を滑り込ませて、しなやかな筋肉で張りつめた腿を撫でる。

「はううううー！」

柔らかな氷を思わせる指に敏感な内腿をさわさわと撫で回され、退魔少女はくぐもつた声を上げてしまう。肌の色が赤みを増し、下着の奥で震え疼いた秘裂が熱い潤みを、じゅ

わああつ、と滲み出させた。

強烈な羞恥心と屈辱感にさいなまれて、心とはうらはらに、身体は発情の度合いを急激に高めてゆく。チャイナコスチュームにたっぷりと染み込んだ乳汁の匂いが、少女の発情臭と混じり合い、甘い菓子のような香りがふわりと立ちのぼる。それは、人の快樂波動を糧としている淫魔にとつては、まさに食欲をそそる香りであった。

「この精気の豊饒ほうじょうにして美味なること……やはりそなたは贅としてふさわしい。この世のものではない快樂をたっぷりと与えてくれようぞ！」

艶めかしい声音の中に、かすかな興奮の響きを交えて黒巫女は告げる。

無表情だった女淫魔の瞳に熱い光が宿り、黒い巫女装束に包まれた白い身体から漂ってくる媚香が強くなった。少女を愛撫する指の動きも濃厚なものになってゆく。

しつとりと汗ばみ震える内腿を撫で回していた冷たい指先が、股間のデルタ地帯へと這い上がり、股布をふんわりと柔らかく盛り上げた少女の丘を手のひら全体で覆い尽くした。ふにゆ、ふにゆつ、ふにゆつ、ふにゆつ……熱いシロップに濡れたマシユマロのような恥丘の膨らみが、ソフトな指使いで揉み込まれる。

「やつ、あうつ、そこ……ダメッ！ やめ……あはあああゝんッ！」

必死に腰をよじり、股間への愛撫から逃れようとしていたフェイランは、可愛らしくも色っぽい声を上げてのけぞった。その動きは必然的に、黒巫女の愛撫に対して秘部を突き

出し、捧げることになってしまふ。

ぴくん、ぴくんっ、と下半身を跳ねさせる少女の恥丘を覆い、女淫魔の指がくねる。

(ダメえ！ アソコが……痺れて……融けちゃうっ！ 融けちゃうよおっ!!)

想像を絶する快感の洗礼に意識が白く染まり、全ての感覚が股間に収束してゆく。

「そうじゃ。わらわに全てを委ねよ。そして淫らに狂うがよい」

ブルブルと痙攣する太腿の狭間で、黒巫女の白い手が少女の性器をすっぽりと包み込んでこね回す。弾力たつぷりの大陰唇を揉み立てつつ、中指は布越しに処女のスリットを擦り責めている。

魔性の指戯を受けて、たちまちのうちに濡れ開いた秘裂は、女淫魔の指を股布ごとぱっくりとくわえ込んでしまっていた。

しゅっ、しゅっ、くちゅ、くちゅっ、くちゆるっ……布と蜜の鳴る音を立てて、恥ずかしい濡れ染みのできている股布をめり込ませ、柔肉の谷間を魔性の指が滑る。

止めどなく蜜液を湧き出させている膣口を布越しに擦られるたびに、膣全体がフルフルと痙攣し、熱いものが胎内を流れ下って溢れ出してしまふ。

(声……出ちゃう……もう、我慢……できないッ!!)

「あんっ！ あんっ、あんっ！ ふわあああああゝんっ！」

押し寄せる快感に耐えきれず、深紅のチャイナ少女は甘い泣き声を上げ始めた。

次第に高く透き通つてゆく艶めかしい声が、蜜液がこね回されるクチュクチュという淫音を交えて大講堂の中に響く。

「心地よいであろう？ おお、秘所が震えておるわ……こんなに濡らしおつて……」

大量の愛液でぐちゃぐちゃになった股間をこね回し、布越しに膣口をほじり責めつつ、黒巫女は言葉責めを加えてくる。左手の指は下着の脇から尻の谷間に滑り込み、アナルの蕾に人差し指を中指を第二関節までめり込ませて搔き回していた。ガクガクと痙攣するフェイランの足下には、滴り落ちた淫蜜の液溜まりができていた。

「どうじゃ、そろそろ果てたかろう？」

女陰をこね回す動きに微細なヴァイブレーションを交えつつ、黒巫女は甘い吐息混じりに問いかけてくる。思わず頷いてしまいそうになったフェイランは、快楽に流されそうになっている己の身体を懸命に制御し、首を横に振った。

「素直でないのう。……そなたはわらわの許しなくしては果てられぬのじゃ。それゆえに、狂うまで責め立てることもできる。このように……な」

秘裂と肛門にめり込んだ指先が震え、壮絶な快感を送り込んできた。常人ならよがり死にするほどの悦波が連続して少女の身体を貫いてゆく。声なき絶叫を放ったフェイランの口に、尻孔から抜かれた左手の指が挿入され、震える舌を摘んでヌルヌルと揉みしごいてくる。舌の上に広がる甘苦い腸液の味が、羞恥と屈辱を煽った。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**